
武装神姫 Battle Prelude

織田 かのか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

武装神姫 Battle Prelude

【Nコード】

N5237Y

【作者名】

織田 かのか

【あらすじ】

『武装神姫 Battle Masters』の二次創作です。

主人公の久遠は、神姫とは全く縁のない生活を送っていた青年。

ある日、友人に神姫を預けられ、彼女と二週間共に過ごすことになる。アーンヴァル Mk.2 型の美羽は、今まで何人ものオーナーの手を渡り歩いてきた神姫。その過去から、久遠とも距離を置いて接しようとするが……。日常と戦いの中で、彼らは少しずつ近づいていく。その中、やがて美羽の過去の真実が明らかに……。

ブログにて同じものを投稿しています。 <http://ame>

blo.jp/dreamingmoon/

神姫。^{しんぎ}

全長15cm程のフィギュアロボ。心と感情を持つ、もともと人々に近い存在。

人々は彼女らに思い思いの武装を纏わせ、戦わせた。

主の夢や想いを載せて戦う。そんな彼女たちのことを、人々は「^{ぶそつしんぎ}武装神姫」と呼んだ。

2040年。疑似的に神姫と一体化して戦うことのできる「神姫ライドシステム」が誕生し、神姫達の闘いは更に多くの人たちの間に広がっていく。

そんな神姫達との出会いは、それこそ神姫の数と同じだけある。

そしてこれもまた、そんな出会いの物語の内の一つ――。

「……うちのアパート、ペットはだめなんだが」

「だから、ペットじゃないっての！」

玄関前で騒がしい声を上げるのは、俺の友人である崇田^{そつた}。今朝早くになにやら大きなバッグを両手に訪れてきたかと思えば、二週間ほど留守にするからペットを預かって欲しいといった趣旨のことを言ってきた。

うちのアパートは犬だろうが猫だろうが雀だろうがペットはご法度。預かるわけにはいかないのだが。

「だから！ ペットじゃないって！」

「何も言ってないだろ……」

「とにかく頼むよ！ 今はこの中で寝てるけど、いい子だから起きても自分で何でもできるから！」

「だから……」

「頼むよ久遠^{くとう}、二週間の間だけだから！ どうせ休み中も家でゴロゴロしてるだけだろ？」

「期間の問題じゃなくてだな……」

さつきからずっとこの調子で、何一つ状況は変わっていない。大体、せつかくの長い休みをペットの世話で潰すのはごめんだ。

「とにかく、ペットはだめだ。他をあたってくれ」

「だあー、もう！ ……と、いかん。このままじゃ飛行機に間に合わないな……。よし！」

と、突然足元に置いてあった旅行鞆を持ちあげたかと思えば、逆の手でバッグをグイッと押し付けてきた。勢いに負け受け取ってしまった。

「よろしく！ いろんな人の手を渡り歩いてきてるから、初対面のお前ともうまくやれるはずだ！ そんなじゃ！」

ビシッと片手をあげられる。そしてそのまま階段の方へと走りだ

した。

「……て、ちょ、おい！ 待てって！」

「任せたー！」

制止の声も聞かず、崇田は階段を駆け下りて行ってしまった。

「何か面倒が起きたらお前の責任だからなー！」

すでに見えなくなつた背中に声をかけておく。聞こえちゃいないだろうが……。

「ったく、しょうがないな……」

大家さんにばれないよう、うまくやるしかないだろう。

腹をくくつたところで、改めてバッグを眺める。

何が入っているのかは知らないが、横から見た面積はノートパソコンくらいで、厚みは男の俺が両手を大きく広げてやっとつかめるくらい。しかし、生き物を入れるにはやや不適切な入れ物であるようにも感じる。

「とりあえず、開けてみるか……」

突然暴れだしても困らないよう、窓やドアをすべて閉め、周りの物を軽く片付けてから、ジッパーを開いてみる。

「……なんじゃこりや？」

バッグの中には、なにやら何本かのコードの入った袋に、小さな缶やボトルが幾つか入った袋。それから、見たことのない、ちょうど人形が入りそうなサイズのカプセル状の機械。そして、バッグよりも一回り小さな、ところどころ痛んでいる古びたアタッシュケース。

それじゃあ、ペットはこの中ということか……？

「動物虐待じゃないのか、こんな狭いケースの中に……」

ケースを取り出し、恐る恐るロックを解除する。そして、そつと開いてみた。

「……これって」

そこに入っていたのは、ロボットプラモデルを思わせる真っ白なパーツの数々。そして……。

身長15cm程のフィギュアロボット……神姫だった。

「預かってくれて……、神姫のことか」

金色の髪に真っ白なボディの神姫。となると、このプラモの部品みたいなのはこの子の武装。彼女は武装神姫ということになる。

生憎神姫に関する知識は乏しいため、彼女のタイプなどはわからないが……。

「眠ってる……のか？」

指先でそつとその頬に触れようとしたとき、パチツと彼女の目が開いた。

「うわっ!？」

驚き、慌てて手を引く。

彼女はゆっくりと上体を起こすと、ぼんやりとした様子で周囲を見回す。

そして、景色がいつもと違うことに気づいたのか、今度こそぱちちりとその大きな瞳を広げ、立ち上がった。

「こ、ここは……」

少し戸惑った様子できよろきよると周囲を見回す。その途中で、俺と目があつた。

「あ……」

「お、おう……」

「……………」

「……………」

……なんとなく気まずい雰囲気。くそ、崇田の奴、預けるのが神姫なんだつたら、最初からそう言えつての! ……いや、聞かなかったの俺か? いや、崇田が悪い。おのれ崇田め……。

「えっと……」

「お、おう、なんだ？」

心の中で崇田を呪っていると、神姫は首を傾げながら声をかけてきた。

「えっと、あなたが私の新しいマスター……ですか？」

「え？ あ、いや、新しいというか、二週間預かるだけというか……」

「じゃあ、あなたが久遠さんですね！」

「お、おう」

どうやら崇田から話は聞いていたらしい。

俺が預かり主であると知ると、神姫は改めて俺に向き直り、深々とお辞儀をした。

「始めまして。新天使型アーンヴァル Mk・2 の美羽^{みう}と申します。短い間ですけど、よろしくお願いします！」

「あ、いえいえ、こちらこそ……」

つついつつられて頭を下げる。

礼儀正しいなあ……。神姫ってみんなこうなのだろうか？

それにしても、崇田のやつ、神姫なんて持ってたのか。初めて知ったぞ。

まあ、それはさておき、だ。

俺に神姫についての知識は皆無。どこにどんな関連ショップがあるかはおろか、どう管理していいものなのかも知らないわけで……。困ったな。下手なこととして壊したりしたら大変だし、やっぱりもっと適切な人に預けるべきだろうか。

「えっと……。あ、あつた、これですね」

……。と、知り合いに頼りになりそうなやつがいないかどうか記憶を探っていると、その傍らで美羽は彼女の入っていたバッグをこそごとと漁っていた。

そして、二つの袋と謎の機械を引っ張り出すと、中身を点検し、それから俺の部屋をぐるりと見回した。

「あ、すみませんマスター」

「……。俺？」

「はい、そうですけど……？」

マスターか。なんだかこそばゆい気分になる。

「あの、パソコンの近くのスペース、少しだけお借りしていいです

か？」

「え？ ああ、まあ邪魔にならない程度なら……。ていうか、何してるの？」

「いえ、お気になさらず」

恐らく缶やボトルも謎の機械も、彼女の使う道具なのだろうが……。

なんて彼女の行動をぼんやり眺めている内に、彼女はパソコン近くに謎の機械を設置。周辺に袋の中身を整然と並べ、彼女の生活スペースと思われる空間を作り上げてしまった。本当に一人でやっちゃうんだな……。

「えっと……、何かこっちで用意した方がいいものとかある？」

「あ、いえ、お構いなく。マスターにご迷惑をおかけしないよう、準備はマスター……。崇田さんのところでしたっけ？」

「あ、そうですか……」

俺が預かる必要なんてあったのだろうか……。まあ、変なペット預かるよりはずっと楽なわけだが。

どうやら充電はあのクレイドルとかいうカプセル型の機械で行えるらしく、他にも俺が面倒を見るべきこともほとんどないらしい。ただ、預かっている間に一度定期メンテナンスがあるから、それだけ連れて行ってほしいとのこと。

しかし、本当にしっかりしてるのな、神姫って。もっと手のかかる面倒なものだと思ってた。

「……というわけで、改めて、これから二週間よろしく願います、マスター！」

「ああ、よろしく」

改めて挨拶を交わす。本当にしっかりした子だ。清楚な印象で、まじめな性格。いい嫁さんになりそう。

「しかし、神姫ってしっかりしてるんだな。旅先での支度も自分の世話も自分でできるだなんて」

「えへへ、私はちょっとだけ特別です。こういうこと、今までたくさんありましたから」

「ああ、崇田が言ってたな。いろんな人の手を渡り歩いてきたって」「はい。それで、新しいマスターに迷惑かけないように、自分の世話は自分でできるようにって」

なるほど。いや、そういう事情抜きにしても、いい子だと思うけどな。

何はともあれ、これなら休み中は安心してゴロゴロ引きこもっていられそうである。

…… 人生、そううまくはいかないものである。

美羽が家に来てから一週間。この短い間にすっかり慣れてしまったのか、俺と美羽は気兼ねなく話せる程度の仲に。今では彼女が簡単な家事を代行してくれるくらいだ。彼女としては預かってくれている恩を返しているだけのつもりなのだろうが、それにしてもいい嫁さんになりそうである。

しかし、万事良好、順風満帆とまではいかなかった。ここまでの付き合いで分かってきたことなのだが……。

彼女は、俺と一線を引こうとしている。

常に俺の手の届く所から一步離れ、しかし全く手の届かない所までは離れない。届きそうでも届かない、微妙な距離を保っている。

初めは、仮初のマスターである俺と距離を置こうとしているだけなのだろうと思ったが、どうやらそうではないようである。崇田に電話で話を聞いてみても、どうやら俺と同じような様子だったらしい。どこに行っても同じ調子でいるようだ。

というわけで、この微妙な距離感が気かりで、おちおちゴロゴロもできない。そこで、なんとかこの奇妙な気まずさを解消できないかと検討した結果……。

「美羽、準備できたか？」

「はい、マスター」

今日は定期メンテナンスとやらの日。せっかく出かけるのだから、この際彼女とアレをやってみることにした。

美羽の案内で、まずは神姫センターへ。オフィシャルショップでメンテナンスをしてもらっている間、パンフレットやチラシなどで情報を収集。スタッフや他の神姫オーナーにも話を聞いてみる。なんといいっても初の試みだ。事前に基本的な情報くらいは知っておきたい。

幸い順番待ちなどもなく、メンテナンスは三十分ほどで終わった。さて、ここからが本番である。

「おまたせしました、マスター」

「おう。んじゃ、行くか」

美羽を連れ、来た道とは別の道に行く。

「……あれ？ マスター、帰り道はそっちじゃありませんよ？」

「ああ、ちよつと寄りたいたところがあつてな」

先に話しておくことも考えたが、彼女のことだ、きっと遠慮して誘いを断ろうとするだろう。

まあ、俺の勝手な思い込みだという可能性もあり、本気で彼女にとって迷惑なのだという可能性もあるわけなのだが……。

とりあえずそんなわけで行きついたのは、この町で一番大きなゲーセン。

「ゲームセンター……ですか？」

俺の肩の上できょんとする美羽を横目に入店。行先はもちろん……。

「あ、マスター、ここって……」

「ああ」

テーブルのような機械が四台ほど並び、沢山の人たちでにぎわっている。そう、神姫バトルのコーナーだ。

「崇田のところでもバトルはあまりさせてもらえなかったらしいじゃないか。やっぱり美羽も武装神姫だし、バトルはしたいだろ？」

「で、でも……」

「いいって。どうせ家にいてもゴロゴロしてるだけだしな。……それとも、迷惑だったか？」

「め、迷惑だなんてそんな！ その、とっても嬉しいです、えへへ」
そう言つて笑う美羽は、気を使っているというわけでもなく、心の底から嬉しそつだった。うん、なんか距離が縮まった気がするぞ。

……て、預かってるだけなんだからあんまりお近づきになっても意味ないのだが。

まあ、何はともあれ、彼女が嬉しそうで何よりだ。

というわけで、家から持ってきておいた武装を装備してもらう。

神話に登場するユニコーンを彷彿とさせるヘッドセンサーに、羽のようなデザインの胸部装甲。洗練されたデザインのリアパーツは、天使の翼のよう。純白の武装を纏った彼女は、まさに天使のような姿であった。

「綺麗だな、その武装。似合ってるぞ」

「ふえ！？ あ、でも、これはアーンヴァル Mk・2用にデザインされたものですから……」

「そういう意味じゃなくてさ、他でもない”美羽に”似合ってると思うぞ、俺は」

「あ、ありがとうございます……」

率直な感想を述べると、彼女は少し恥ずかしそうにしながらそう答える。確かに同じタイプの神姫ならだれでも見た目の整合はとれるのだろうが、やはり美羽だからこそ、この武装が似合っているのだと思えた。

「……さて。誘っておいてなんだけど、俺、バトルの経験皆無なんだよな」

改めて本題に戻る。格ゲーなら人並みにできるが、神姫バトルともなれば勝手も違うだろう。

と、今になって不安になってきていると、美羽はにこりと笑って励ましてくれた。

「大丈夫ですよ。最初は誰でも初めてですし、そんなに難しくはないですから」

「まあそうだよな。よし、頑張ってみるか！ ……さて、だれかい相手はいないかなって……」

できれば、俺と同じ始めたばかりの相手がいいのだが。

「……お。ねえ、君」

「ん？ 俺か？」

と、相手を求めて視線を彷徨わせっていると、誰かが俺に声をかけ

てきた。

振り向くと、そこには高校生くらいの少女。手に持ったバッグからは、神姫がこちらを見上げていた。

「もしかして、バトル初心者？」

「ん、ああ。あんたも？」

「そうなの！ あ。あたしは初野^{ついの}。ねえねえ、よかったらあたしのテイルとバトルしてくれない？」

持ち上げたバッグから首だけ出して橙色の大きな瞳でこちらをのぞいていたのは、美羽より少し小さな黒髪の神姫。さっきシヨップで見たカタログによると……、たしか、ハウリン型ってタイプだ。

「この子臆病でさ。もつとたくさんバトルの経験積ませて、解消できたらなって」

「ま、ますたあ……。僕、やっぱりバトルは……」

「ほらテイル、びくびくしてないで挨拶して」

初野に促され、テイルは少しおびえた様子で俺たちに俺たちに挨拶した。俺たちも挨拶と自己紹介をし、雑談を交えながら空いている台に向かう。

「まあ、お互い初心者ってことで、お手柔らかにお願いね」

「はは、よろしく頼むよ、先輩」

なんて言っでは見るが、お互い本気で行こうとしているのが見え見えだった。

「では、よろしく願います！」

「よ、よろしく、願います……」

「ああ、よろしく。行くぞ、美羽」

「はい、マスター！」

改めて挨拶を交わし、ゲートに互いの神姫が立つ。

フィールドは、円形の闘技場。初心者には戦いやすいフィールドだ。

フィールドと、互いの神姫の準備が完了する。そしてついに……。

「……ライドオン！」

俺と美羽による、初めてのバトルが始まった。

「……すげえな、これ……」

目を開くと、美羽が見ているのと同じ光景が目の前に広がった。自分の掌を見つめるようにすると、そこには美羽の手がある。

「これが、神姫ライドシステムか……」

『マスター、テイルさんたちが来ましたよ!』

「お……」

反対側のゲートから、犬を模した緑色の武装をまとった神姫が現れる。

「んじゃ、ここはひとつ気合い入れて……」

身構えようとしたその瞬間、相手の神姫はこちらをビシッと指さし、大声を発した。

『……さあ、勝負だよ、美羽! 手加減無用、僕も本気で行くから覚悟しな!』

「『……え?』」

我が目を疑った。そこにいたのは、さっきバッグの中でびくびくしていた彼女とは全くの別人(別神姫?)だったからだ。

そこに迷いも躊躇も見られない。あるのは、燃え盛る闘志と覇気だけ。

「あの、もしかしてテイルって、バトルになると性格変わるタイプ?」

『そのようですね……』

聞いてないぞ、おい。

『と、とにかく、戦いましょう、マスター』

「あ、ああ……」

いかんいかん。気迫で負けたらバトルにも負ける。

「行くぞ美羽! こっちも全力だ!」

『はい!』

正直勝手はさっぱりわからん。だから、とりあえずは単純な戦法で相手を攻めながら、感覚を把握する。

互いに地を駆け、距離を詰めていく。

ヘッドセンサーの感知範囲内に入ったのを確認し、相手をロックオン。射程範囲まで一気に走り込み、一つ目の武装を転送する。

転送したのは、青白く発光する小剣。扱いやすく安定した武器だ。
『はあっ！』

掛け声とともに切りかかるが、流石は犬型というべきか、素早い身のこなしでかわされてしまう。

「怯むな！ 攻めるぞ！」

『はい！』

続けて切りかかるが、攻撃はかすりもしない。神姫の性能の違いもあるが、それ以上に多少なりとも経験に差があるのが影響しているのだろう。

「なら、これならどうだ！」

相手が横跳びで斬撃を躲した瞬間、左手にハンドガンを送る。相手が着地しようとしたところをめがけて発砲する。

『チッ！』

肩のあたりの装甲に命中する。ほとんどダメージはなさそうだが、隙は作れた！

『やああ！』

その隙を逃さず、剣で切りかかる。

『甘いよ！』

『え……？』

テイルは逃げるのではなく、一瞬で崩れた体勢を立て直し、逆に距離を詰めてきた。そして、手甲を構える。

しまった、相手の攻撃の方が早い！

「美羽！」

『っ！』

この体勢から回避に入るのは難しい。盾を構えようとするが、そ

れすらも間に合わない。

『喰らえ!』

相手の拳が、盾を構えようとした腕を弾く。そしてそこから、すかさず怒涛の連撃が入れられる。

『っ! く、ああ!』

『飛んでけ!』

『うああ!』

止めに勢いをつけた回し蹴りが入り、吹き飛ばされる。

「くっ! 立てるか、美羽!」

『な、なんとか……』

美羽の体力はまだ残っている。

相手の武器はスピード。なんとかそれをつぶさなくてはならない。もつと相手の動きを止めるいい方法があれば……。

「! これだ!」

使っていないかったもう一つの武器を転送。そして、相手に悟られないように飛ばしておく。

『ほら、ボーっとしてると、次行くよ!』

テイルは間髪入れず突進してくる。どうやら相手は完全なインフアイタータイプのようだ。

『二度も、当たりません!』

ステップで突進をかわし、ハンドガンで狙撃する。

『痛っ!? くそ、なんのこれしき!』

相手の注意は完全にこちらにひきつけられる。

……その背後に、浮遊する二つのビットが現れた。

『行ける……、当たって!』

『え……?』

美羽の叫びに、テイルはようやくビットの存在に気づく。

『しまっ……、うわああ!』

ビットから連射される弾丸。防ぐのに必死で、身動きを取る余裕がない。今がチャンス!

「美羽！」

『はい、マスター！』

小剣を転送し、背後から接近する。

『こ……のお！』

しかし、斬撃が届くその瞬間、テイルは突然吠えたかと思えば、ビットの弾丸を振り払い、そして……。

『き、消えた？』

さっきまでそこにあった神姫の姿が突然消え、弾を撃ち切ったビットだけが浮遊していた。

『そんな、どこに……』

ハウリン型の神姫が姿を消す能力を持っているとは聞かなかった。ならば、消えたように見えるほど高速で動いたということ……。

「これって、レールアクション……！？　まずい、美羽、逃げる！」

『え？　え？』

混乱する美羽。だめだ、間に合わない！

『はあああああああ！！』

背後から響く遠吠え。そして……。

『いっけええええええ！！』

『っ……！？』

声を発することもできないほどの衝撃が、背中に突き刺さる。

それは恐らく、単純な正拳突き。しかし、レールアクションの勢いを載せた正拳突きは、どんな格闘技よりも強烈で凶悪な攻撃力を秘めていた。

『う、ああ！　あああ！』

地面を跳ね、二度も三度も転がり、柱にぶつかる。

『そん……な……』

そしてそのまま地に崩れ落ちる。

「美羽！」

再び立ち上がる力は、もう残っていなかった。

一瞬置いて、視界に『LOSE』という表示が現れる。

「負け……か」

ようやく、自分の敗北を悟る。

「ごめんな。大丈夫か、美羽」

「マスター……。ごめんなさい、私のせいで……」

「いいて。美羽も久しぶりだったんだろ、バトル？」

「でも……」

美羽は座り込んだまま落ち込んでいる。ん……、俺としては勝ち負け関係なく楽しかったんだが、美羽はそうでもないのだろうか？

「……美羽は、どうしても勝ちたかったのか？ 負けてつまらなかったか？」

「そ、そんなことはないです！ 悔しかったですけど……、でも、マスターとのバトルは、楽しかったです」

「そうか、なら良かった。俺も楽しかったし、また次に頑張ればいい。俺も負けっぱなしは悔しいしな。……ほら、もう戻ってこい」

「マスター……。はい！」

美羽へのライドが解除され、目の前には再びゲームセンターの光景が広がる。

「ありがとな。楽しかった」

「こちらこそ。美羽ちゃんは大丈夫？」

握手を交わしながら、初野は美羽を気遣ってくれた。

「はい、私は大丈夫です。ありがとうございました、初野さん。テイルさんも……、あれ？ テイルさん？」

にこりと笑いながら神姫同士で挨拶しようとする、テイルはバツグの奥へと引っ込んでしまった。もう元の臆病モードに戻っているようだが、それにしたってこの反応は……。

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい、僕ってばまたひどことしちゃって……、痛かったですよね、僕のこと嫌いになりましたよね、あああごめんなさいごめんなさい……」

……なるほど、そういうことな。

「だ、大丈夫ですよ！ 最後の一撃は効きましたけど、楽しかったですし！」

「あうあうあう……」

バッグの奥に引きこもったきり、出てくる気配がない。

「あ……。ごめんね、この子、こうなったらしばらく治まらないの。……こんな子だけど、またバトルしてくれる？」

「ああ、喜んで」

「はい、またよろしくお願いしますー！」

「良かった。じゃ、またね！」

手を振って、初野と別れる。

「さて……。調子がつかめてきたところで、もう少しやってくか？」

「はい！ 私ももっとバトルしたいです！ ……あ。マスターが嫌じゃなければ、ですけど……」

「ん？ 美羽がやりたいなら、何度でも付き合っぞ？」

「で、でも……」

まだ遠慮しがちな。まあ、そんなすぐには無理だよな。

「いいっていいって。俺も今ので、神姫バトルの面白さを知ってしまっただけ。美羽さえよければ、俺はむしろもっとやりたいくらいだ」

「本当……ですか？」

「ああ。ほら、次の相手、探しに行こう」

「マスター……。……はい！」

さっきのバトルを通して、大分絆は深まったはず。美羽の方から心を開いてくれているのを感じた。まあ、どうせ預かっているだけなのだからあまり仲良くなっても仕方ないが……。

だが、崇田は彼女をどうするつもりなのだろう。電話で聞いた時には、彼もまた半ば無理やり前の持ち主から押し付けられたそうだし。また、誰かに譲ってしまうのだろうか。

「……………」

「？ マスター、どうかしたんですか？ 私の顔になにか？」

「ああ、いや。なんでもない」

まあ、俺に決められることではない。崇田がどんな決定を下そうと、俺に口出しする権利はないのだから。

俺の役目は、あいつが帰ってくるまで美羽を預かっていること。そして……。

あいつが帰ってくるまでのつかの間の時間を、彼女と楽しく過ごすこと。それだけだ。

interlude

(……どうして、こんなに暖かいんでしょう)

彼と共に戦うようになって数日目の夜。主の青年が寝付いた後、彼女はふと心の中でつぶやいた。

彼もまた、同じはずだった。過去に何人もいたはずの主と、変わらないはずだった。

優しさを感じない距離。それは、裏を返せば、お互いを傷つけない距離でもある。だから彼女は、必要以上に近づくことをしなかった。互いの針で互いを傷つけあうくらいなら、寒さを我慢することを選んだ。

それは、今回の主も同じはずだった。少なくとも自分は、そうなるように意識していた。

それなのに彼は、自分でも気付かぬうちにその距離を埋めてしまった。胸が暖かいのは、きっと彼がすぐそばにいるから。

「……………」

音を立てないよう、そっとクレイドルから起き上がる。そして、彼の寝顔を見つめた。

なんだかおかしい気分になる。人間の言う「胸が高鳴る」とは、こういうことだろうか。

「……だけど、きつともう、限界です……………」

彼と共に過ごせる日は、もうごく僅か。

終わらなくてはいけない。自分にも、彼にも、手遅れになってしまいう前に……………。

美羽との初バトルから更に一週間。

あの日から、俺と美羽は毎日ゲームセンターにやってきては、いろんな人とバトルをした。

初日に会った初野とも、あれから何度もバトルをした。今ではゲームセンター内で一番仲が良いオーナーだろう。テイルも相変わらず臆病だが、彼女もバトルを通して成長しているらしく、バトルの後にバッグの奥へ引きこもってしまうようなこともなくなってきた。

俺と美羽も、だいぶ仲良くなれたように思う。バトル中も息が合うようになってきたし、もうこのゲームセンターの初心者層は卒業できている。

そして今日もまた、彼女と共にバトルを重ねていた。

「お疲れ、美羽」

「お疲れ様でした！」

今日も快勝が続く。俺と美羽って、割と相性がいいのだろうか。

「少し休むか」

「そうですね。結構連続で戦ってますし……」

美羽も連戦で疲れているようなので、休憩をしにフードコートへ向かう。自販機でジュースを買って一息ついていると、背中から声をかけられた。

「お疲れ、久遠君」

「お、お疲れ様です」

「お、初野にテイルか」

声の主は、思った通り初野とテイルだった。ペットボトルのジュースを片手に、隣に腰を下ろしてきた。

「見てたよ、さっきのバトル。今日も絶好調だね」

「ありがとな。初野もバトルしてたのか？」

「うん。今日は結構調子いいんだ！ まあ、久遠君たちほどじゃないけど」

自分でこう言うのもなんだが、この数日で俺と初野の間にはだいぶ実力差が出てしまったらしい。ゲームセンターのデータベースに登録すると戦績などを基にランキングに参加できる。そのランキングでは、先週の段階では初野は俺の三、四位ほど上にいたのに、今では俺の方が彼女より七位上にいる。

「しっかしまあ、あたしらの方が先輩だったのに、ずいぶんホイホイと上に行っちゃったね」

「始めてみたら意外とな。美羽が元々強かったのかもしれん」

「またそんなこと言って、これは久遠君と美羽ちゃんの絆が成した成果だって！ ね、美羽ちゃん。……美羽ちゃん？」

初野が声をかけるが、美羽はなんだかボーっとしたまま答ええない。

「おい、美羽？」

「……あ。あ、は、はい！ なんですか、マスター？」

「大丈夫か、美羽？ なんかボーっとしてたぞ？」

やはり連戦過ぎて疲れているのだろうか。普段ならこんなこともないのだが……。

「久遠君、美羽ちゃんに無理させすぎじゃないの？」

「かもな……。今日はもう帰るか、美羽？」

「い、いえ！ ちよつと休んだら平気ですから！ せつかくですから、テイルさんとも戦いたいですし」

「ふ、ふえ！？ ぼ、僕なんかじゃ、美羽さんにはとても……」

疲れているのに無理をしている……というわけではないようだが、何かを隠しているようで、気がかりだった。

「……わかった。んじゃ、あと一戦やったら、今日は帰ろう」

「……はい」

美羽は、申し訳なさそうな表情を浮かべながら頷いた。しかしここにきて彼女に何かあったら、崇田のやつに何を言われるかわかった物じゃない。

ジュースを飲み終え、ゴミ箱に放り込む。するとその隣で初野も立ち上がっていた。

「美羽ちゃんも乗り気みたいだし、その一戦、あたしとやらない？ 装備新調したから、前みたいにはいかないよ！」

「お、そうなのか。よし、受けて立とう」

「えへへ、楽しみです、テイルさんとのバトル」

「ええ！？ ま、ますたあ、本当に久遠さんたちと戦うんですか！？」

「ふふん。あたしたちの方が先輩だってことを、ここらで再認識させてやらないと」

「そ、そんなこと言っちゃって……」

「大丈夫！ 新しい武器も買ったし、行けるって！」

わいわい騒ぎながら神姫バトルコーナーへ向かう。

「……………」

途中、ふと、誰かの視線を感じたような気がした。

しかし、振り向いてみてもそこには誰もいない。

「……気のせいかな？」

「マスター？ どうしました？」

「いや、なんでもない。よし、先輩面して偉そうにしてる初野の鼻を明かしてやろう！」

「マ、マスター、初野さんの方が先輩なのは本当なんですから……」

感じた視線のことがなぜか妙に気がかりだったが、無視することにして、初野たちを追う。

美羽もバトルになると普段通りの調子で戦うことができ、初野とテイルとも、いつもよりは苦戦しつつも、勝利を収めることができた。

だが、バトルが終わった後、やはり彼女は心ここにあらずといった様子でボーっとしていた。

やっぱり、どこか悪いところがあるのか、それとも……。

帰りにシヨップで検査してもらうことも提案したが、彼女の方が「問題ない」の一点張りだったため、まっすぐ帰宅。

帰ってきてからも、時々ゲーセンにいた時のようにボーっとしていた。家事の手伝いも問題なくこなしてくれたし、確かに体に異常はないようだが……。

とりあえずはなんの問題もないまま、気づけば夜も遅くなっていた。

寝る前に歯を磨いて部屋に戻ってくると、美羽は真っ暗な部屋の窓際にちよこんと座って、窓の外を眺めていた。

「……美羽？」

「あ、マスター……」

近くに座り込むと、美羽は立ち上がってこちらに向き直った。

彼女はわずかに笑みを浮かべていたが、そこにはいつものような明るさがない。

「どうしたんだよ、こんなところでボーっとして」

「た、ただボーっとしてたわけじゃありません！……その、少し考え事を」

そう言うとな彼女は、今度はこちらを向いたまま窓際に腰を下ろした。

「マスター。私、こんなに誰か一人のマスターと仲良くなったのって、初めてかもしれないです」

「そうなのか？」

彼女がつぶやいた言葉は、俺にとって少し意外なものだった。確かにいろんな人の手を渡り歩いてきたとは聞いていたが、俺が二週間までここまで仲良くなれるくらいだから、もっと仲のいいマスターが過去にいたものだと思っていた。

「はい……。こんなに暖かい気持ちになるのは、たぶん、初めてだ

と思うんです。最初のマスターの下を離れて以来、みんな押し付けあうように、私を次の人へ渡していたみたいですから」

「……………」

どうして、とは訊けなかった。そんなの、彼女の方が知りたい事情だろう。

「……勿体ない奴らだな。美羽、こんなにいい子なのに」

「え……、あ、ありがとうございます、マスター」

美羽は一瞬照れくさそうに微笑んだが、その表情はすぐに沈む。

「……マスター」

言いづらそうにして、美羽は口を開いた。

「ん？ どうした？」

「その……………」

少し迷っている様子であったが、美羽は続けて言葉を紡ぐ。

「……もう、終わりにしませんか」

「……………え？」

何のことだ。咄嗟に思いついた言葉は、ただそれだけの疑問符。話の流れから、何を終わらせようとしているのかはわかる気がした。わからないのは、どうしてそんなことを言い出したのかということ。

全部上手くやっている。バトルも好調だし、それ以外の日常も問題なく、仲良くやっていけているはずだ。

しかし、彼女の表情は重かった。

「明日、ですよ。崇田さんが帰ってくるの」

「あ、ああ。電話ではそう言ってたかな」

……なんとなく、彼女の言わんとしていることが分かってきた。

どうして、彼女が今日一日ボーっとしていることが多かったのかも。

「……もう、お別れですよ」

「ま、まあ、崇田のところに帰るんだろうけど」

「じゃあ、もう終わりにしませんか。バトルに行くのも、必要以上に親しくするのも……………」

「……なんでだよ。これで一生のお別れじゃないだろ」

「……そうなるかもしれませんがよ」

うつむいた彼女の表情は、こちらからうかがうことはできない。何を思っただんなことを言っているのか、俺には分からなかった。

「そうなるかもしれないって、どうして？」

「……私が帰ったら、崇田さんは私を、その……、手放すかもしれません」

「なんでそう思う？」

「わかりません。ただ、なんとなく、そんな気がするんです……」

何度も何度も別々のオーナーの手を渡り歩いてきたという美羽。だからまた、それと同じように崇田からも手放されてしまうと思っているのだろうか。

「……崇田の奴が、そんな簡単に美羽を手放すとは思えないけどな」

「違うんです」

「違うって？」

訊き返すと、美羽はぼんやりと窓の外を見上げた。少し欠けた月が、夜空に輝いていた。

「私、前のマスターのこと、全然覚えてないんです」

「覚えてない？」

「はい……。崇田さんの前に別のマスターのところにて、その前もまた別のマスターがいて、その前も……。そのことは覚えてるんですけど、それがどんな人だったか、そこで私はどんなふうにしていたかさえ、覚えてないんです」

「それは、記憶のリセットってやつか？」

「はい」

普通、神姫を手放す場合は、新しいマスターのところへ行く前に、前のマスターのところにて記録、すなわち、一切の記憶を削除するのだという。だから、美羽に前のマスターの記憶がないことは、不思議ではなかった。

だから不思議なのは、どうして彼女がここでわざわざそのことを

話すのかということ。

美羽は、月空を見上げたまま、ぽつぽつと喋り始める。

「……時々、思っんです。どうして、みなさんは私のことを手放したのかなって。それも一回や二回ではなく、何度も何度も同じことを繰り返して……」

それは、ただ疑問を呟いているようで、違った。

「それで、考えたんです。どうして、同じことを何度も繰り返すのか、その理由を」

彼女の表情は見えない。ただ、そこには深い悲しみと不安が渦巻いているような気がした。

そして彼女は、重々しく口を開く。

「……悪いのは、私なんじゃないかって」

「……え？」

「私が何度も手放されるのは、今の私の記憶にない場所で、私が何かをしているせいなんじゃないかって」

「そんなこと……!」

なぜか、否定できなかった。

俺も薄々思っていたのかもしれない。どんなマスターの下でもたどる末路が同じなのなら、その原因は彼女にあるんじゃないかと。

「崇田さんのところには、もう何か月もいます。だから、何かが起きるとしたら……、何かを起こしてしまうとしたら、そろそろじゃないかなって」

こちらを見ないまま、美羽は自嘲気味に顔を歪める。

「そうしたら、きっとマスターとも会えなくなります。マスターのこと、忘れてしまいますから……。それなのに、これ以上仲良くなくなってしまうたら……。これ以上マスターの優しさを知ってしまったら、別れが辛くなってしまう……」

「美羽……」

「だから、お願いです」

その時初めて、美羽は俺の方へと向き直った。

「明日目覚めたら、また最初の日のように振る舞ってください。マスターと一緒にバトルをしに行ったあの日よりも前のように……、他人でしかなかった私たちに、戻れるように。そうすれば私も、大丈夫ですから」

その表情は、あまりにも寂しげで。

そんな表情の彼女の願いに応えることなんて、できるはずもなくで。

「……まだ、お別れだって決まったわけじゃないだろ」

「それでもです。長引けば長引くほど、忘れるのが辛くなりますから……」

「……………」

確かに、どうせ別れることになるなら、早いうちに互いの関係を断っておいた方がいい。……理屈では、わからなくもない。

だが、このまま、今夜だけで終わってしまうのは、あまりにも名残惜しく感じた。

……彼女と別れるのが、嫌だった。

「……わかった」

「マスター……………」

承諾する代わりに、条件を提示する。

「その代わり、明日、もう一度だけバトルをしよう。そうしたら、もう終わりにするから」

それは、ほんの一瞬、別れを先延ばしにするだけの、悪あがき。それを聞いた美羽は、少しの間黙り込んでいたが……。

「……はい。わかりました」

そう言って、頷き返してくれた。

「……じゃあ、私、今日はもう休みますね」

「……ああ」

「おやすみなさい、マスター」

美羽はクレイドルに横たわると、そのままスリープモードに入ってしまった。

「……明日でお別れ、か」

思った以上に、自分の中で美羽という存在が大きくなってしまったことに気づく。

今まで出会ってきたのどんな人よりも、近くに存在を感じていた。そんな彼女が、明日でいなくなってしまう。

「……別れが辛いのは、お前だけじゃない……」
ベッドにもぐりこみ、そっと呟いた。

翌朝昇った太陽は、何も変わらず明るく輝いていて、それがなんだが憎たらしく感じられた。

「……んじゃ、行くか」

「はい、マスター」

いつもより、どこか余所余所しい雰囲気。

”いつも”なんて思わず言ってしまったが、彼女と過ごしたのはたった二週間だったことに今更気づく。

「崇田がこっちに着くの、昼過ぎだってさ。だから、ゲーセンで落ち合うことにしてもらった」

「はい、わかりました」

「……………」

やっぱり、なんだか落ち着かない。

最初にバトルに行くまでも、同じ理由で落ち着かない日々を過ごしていたはずだ。しかし今は、その時とは比較にならないほど、居心地が悪い。

ゲーセンに着く。いつもと同じ喧噪が、少しだけ遠くを感じる。

「お、やつぱり、二人とも！」

入ってすぐ、初野が俺たちに気づく。

「おはよー！」

「……ああ、おはよう」

「おはようございます、初野さん、テイルさん」

「？ 二人とも、元気くない？」

初野にはすぐ気づかれたようだ。俺も美羽も、かつてないくらいどんよりしていることに。

「や、やつぱり、美羽さんに何か……」

「えー？ な、何か異常があったの、美羽ちゃん！？」

「……いえ、問題ありません」

「そっか、ならよかったけど……。ねえ久遠君、今日もあたしとバトルしようよ！今日は負けないよ！」

初野の誘い。いつも通りのことなのに、今日はいつものように挑戦を快諾することはできなかった。

「……美羽。いいか？」

「はい。初野さんとテイルさんが相手っていうのは、なんというか、ちょうどいいかもしれないです」

「？　ちよつとどうしたの、二人とも。本当になんか変だよ？」

「何でもない。……やろうぜ、バトル」

「う、うん……？」

言葉少なに、空いている台へ向かう。

奇しくもそこは、最初に彼女たちとバトルしたのと同じ台だった。

「……んじゃ、よろしく」

「よ、よろしく、お願いします……」

「ああ、よろしく。……行こう、美羽」

「はい、マスター」

いつものように、美羽にライドする。

しかし、彼女との一体化率を示すライドレシオの数値は、かつてないほど低く……。初日よりもお低いくらいだった。

そんな状況でまともに戦えるはずもなく……。

「み、美羽！　左……、い、いや、右だ！」

「え、えつと……、うう……」

剣は掠りもせず、銃弾は明後日の方へと飛んでいく。

「……………」

そんな俺たちを、テイルとその向こうにいる初野はどこか冷たい目で見つめ……。

「あ……………！」

小剣で切りかかった瞬間、姿を消した。

一瞬、何が起ったのかわからなくなる。

この数日で、そんな相手の動きなど、簡単に見切れるくらいにな

つていたはずなのに。

「……ハッ！ 美羽、後ろ……！」

『え？』

なんとか反応して振り向く。そこには、全力で突進してくるティルの姿が。

『っ！』

回避する余裕もなく、盾を構え、ぎゅっと目をつむる。

……が、いつまで経っても、彼女の強烈な打撃はやってこなかった。

恐る恐る目を開くと、彼女の拳は、胸の前に構えた……、構えられてすらない、ただそこに持ち上げられていただけの盾に、当たるギリギリのところで止まっていた。

『……もう、止めよ』

それから彼女は、どこか悲しげに拳を下ろし、背を向ける。

『ま、待つて、テイルさん！』

『今ので勝負はついてた。……こんな弱いあんたとは、もう戦いたくない』

『あ……』

冷たい言葉を投げかけ、彼女の方から勝負をリタイアされる。

「……………」

冷たい視線を投げかけてくるのは、彼女のマスター、初野の方も同じだった。

「……すまん」

美羽をバトルフィールドから帰投させながら、誰へともなく謝った。

「……まあ、悩み事で調子でない日もあるだろうけどさ。今日の久遠君たち、本当におかしいよ。どうしたの？」

「……いや。まあ、ちよっと……な」

美羽と目を合わせる。

悲しそうに、しかし、これでいいのだとばかりに、ふいと目を逸

らされた。

初野には、美羽のことは何も話していない。預かっているだけだ
ということは話したが、彼女が何人ものオーナーの下を渡り歩いて
きたことなどは話していなかった。

だから、今日でお別れになることも、話さないつもりでいた。

「悪いけど、今日はこれで……」

「言われなくても、本調子じゃない君とは戦いたくないよ。……ま
た今度、本気で来れる時にお願ひ」

「……ああ。また今度、な」

恐らくは叶うことのない約束を交わして、彼女は去っていく。

入れ違いに俺のところへ手を振りながらやってきたのは、崇田だ
った。

「おう、お疲れ！」

「ああ」

「悪いな、バトルまでやってもらったって？ おお、美羽。いい子
にしてたか？」

「はい、マスター……」

「ん？ なんか元気ねえな？」

「まあ、いろいろあつたんだよ」

預かっていた間のことをそこに報告しながら、サービスカウ
ンターへ向かう。これで終わりなのだから、ランキングのデータを
削除してもらわなければいけない。

「では、神姫をお預かりしますね」

「はい、お願いします」

データ削除の為に、美羽をカウンターに預ける。

「へえ、仲良くやってたんだな」

「ああ、まあな」

「しかし、ランキングも結構良いとこまで来てたじゃねえか。記念
にとつとけば？」

「戦わなけりゃ勝手にランクは落ちてくし、ほつとけば勝手に消え

ちまうよ」

そう言いつつも、彼女と共に上を目指したランキングが名残惜しいのは事実だった。

昨日の段階で、ちょうど真ん中くらい。さっきのバトルはノーコンテスト扱いで、戦績には影響してないらしい。

ボーっと眺めていると、不意打ちみたいに俺と美羽の名前が消えた。

これで崇田に返せば、何もかも終わるのだ。

「いいのか？」

「いいって、何がだよ？」

「なんか、愛着湧いちゃったんじゃない？」

「まさか。これで落ち着いてゴロゴロできるってもんだ」

「へえ、そうかい」

ほどなくして、カウンターの奥から美羽を連れたスタッフが出てくる。

「お待たせいたしました。神姫をお返しいたします」

「はい、どうも……」

ぼんやりとうつむいている美羽を受け取ろうとした、その時だった。

「痛っ!？」

突然、誰かが俺を突き飛ばし、走り去っていく。その先の方でも小さな悲鳴やざわめきが上がっていた。

「いつてえ……。なんだよ、いたい……」

呻き声を上げながら立ち上がるうとした瞬間、頭の上で崇田が悲鳴みたいな叫び声をあげる。

「久遠、美羽が!」

「はあ……? 美羽がどうしたって……」

「美羽が……、今お前突き飛ばした奴が、美羽を奪って逃げた!」

「え!？」

慌てて飛び起きる。カウンターのの上にいたはずの美羽は、確かに

いなくなっていた。

「クソッ、あいつ!」

「お、お客様、落ち着いてください! 今、警備のスタッフと連絡を……」

「そんなで間に合うか! 行くぞ、崇田!」

「お、おう!」

崇田を連れて、誘拐犯が走り去った方へと走っていく。

たった今、何もかも終わろうとしていたことなんて、もはや忘却の彼方だった。

「久遠君！」

「初野！？」

途中で、初野も追ってきた。

「誰だ？ 久遠の彼女？」

「冗談言ってる場合か！ 初野、さっき……」

「美羽ちゃんをさらった見るからに怪しい黒服の奴でしょ？ あつちに走つてくのが見えた！ あたしも手伝うよ！ あんな風に勝負をうやむやにしたまま終わりなんて、ごめんだからね！ あ。あたし初野ね！ よろしく！」

「て、テイルです、よろしくです」

「お、おう、崇田だ、よろしく！」

走りながら互いに自己紹介をする。

「たぶん裏口から出て行っただと思う。あの奥は抜けるまでしばらく一本道みただから、手遅れにならなければ追いつくはず！」

「サンキュ！」

とにかく走る。他の客には申し訳ないが、非常事態なので仕方ない。

それにしても、よりによってこんな日に、最後の日になってこんなことになるだなんて、なんて最悪のタイミング！

裏口は乱暴に開け放たれていた。先頭に立って飛び出すと、そこは反対側の建物との隙間だった。

「いた！ あいつ！」

遠くに背中が見えた。まだ追いつける距離だ。

走って追っていくと、誘拐犯は路地裏を抜けて大通りを横切り、

また路地裏へと逃げ込んでしまう。

俺たちも後を追うが、ほどなくして分かれ道にぶつかる。

「どこに行きやがった……」

「迷ってる暇はないよ。ここは別れて探そう」

「偶然にも道は三つか……。よし、オレはこっちを探す！」

「んじゃあたしはこっち！」

「俺はこっちか……。みんな、協力してくれるのはありがたいけど、無茶はするなよ！」

「お前もな！」

「君もね！」

崇田が左、初野が右、そして俺はまっすぐの道を進む。

足場が悪い。放棄されているゴミやら何やらを文字通り蹴散らしながら駆けていく。

が、着いた先は行き止まりだった。

「くそ、はずれか……」

二人に連絡を取ろうと携帯を取り出そうとした、その時だった。

「いいや、当たり前だよ。むしろ、そうじゃないと困る」

「っ！？」

後ろから声をかけられ、振り向く。

そこには、深くフード被った、中学生くらいに見える少年が立っていた。

「お前が美羽を連れて行っただのか……？」

「ふふ。連れ去ったのは僕じゃない。でも指示をしたのは僕だよ」

「美羽をどこへやった！」

「おっと、怖いなあ。そんな顔をしないでよ、久遠君？」

「！？」

会ったことのない相手に名を呼ばれ、不気味な不快感に襲われる。……落ち着け。ランキングにも名を出しているんだ。知られていても不思議はない。

「……もう一度聞く。美羽をどこへやった」

「まあまあ落ち着きなつて。僕も黙って彼女を連れて行ったりはしないからさあ」

にやにやと薄気味悪い笑みを口元に浮かべ、少年は続ける。

「彼女は、今頃僕らの拠点にいるはず。キミたちの通うゲームセンターとは違う、ちよつとブラックなゲームセンターにね」

「美羽をどうするつもりだ」

「さて、どうしよつかなあ？ 神姫ってねえ、いろいろ利用価値があるんだよ？ 過酷労働ロボットにも使えるし、改造した武器を持たせれば兵器にもなる。ちよつとあちら側にイッちゃってる人形偏愛家の方にも高く売れちゃうし、えげつない改造プログラムを制作しているプログラマーに実験台として売りつけることもできる。ふふ、どの道、彼女が平和に過ごせるとは思わないけどねえ。心も体もズタズタのスクラップになっちゃうんじゃないかなあ」

「お前……！」

「おつとお、まあまあ落ち着いてくださいよう。僕はそんなひどいことしませんってばあ、やだなあ」

「……………」

わざと挑発的な物言いをしている。

引き込まれたら負けだ。冷静さを保て。

少年はにやにやと笑いながら、いちいちこちらをいらだたせるような喋り方で続けてきた。

「僕はね、サンプルが欲しいんだ。それでねえ、彼女には前々から目をつけていたんだよ」

「美羽に？」

「うん。彼女は特別な神姫。理由あって、もうなかなか手に入らないだよねえ。だから、僕が裏からこっそり手を出して、表のルートに出ないようにしてたわけ」

「お前が……？」

「そ。表のルートに出ちゃったら、せつかくのサンプルがパーだからねえ。んで、そろそろいい頃合いかなあと思って、貰いに来たわ

け」

つかつかと歩み寄り、俺を見上げる。

「彼女、僕にくない？　ねえ、いいでしょ？　キミみたいな屑が持つてるよりも、僕がデータサンプルとして有効に使ってあげたほうが彼女のためだってえ」

「……………」

”サンプル”なんて言い方をしているが、普通の意味ではないことは確かだ。

フードの陰から覗く、少年の物とは思えないほど淀み切った目を見ればわかる。

「…………断る、と言ったら？」

「却下するね。屑に選択権はないんだよ。キミに彼女を持つ権利があるとも思ってるの？」

「お前にはあるとも言っのか？」

「僕にはあるんだなあ、これが！」

少年は大仰に両腕を広げ、叫ぶ。

「より強力で、より完全な神姫をつくるために！　キミたちの持つてるお友達ごっこ用のおもちやとは違う、もつと凶悪な神姫を作るために！　僕が彼女の”特性”を余すところなく生かしてあげられるんだよ！　そして強い神姫を持つことを許されるのは、僕のように強いオーナーだけ！　キミみたいなゆとりゲーセンですら底辺にいるような屑に！　所有権はないねえ！」

…………狂ってるな。普通じゃないことは確かだ。

言っても聞かなそうだし、まともな言葉は通じそうにない。頭の歯車が欠落してるような奴には、わかりやすい証拠を突きつけてやるしかないだろう。

「…………なら、俺がお前と戦って勝ったら、俺に美羽と一緒にいる権利があるわけだな」

「はああ？　何を言っちゃってるのかな？　はあ、これだからゆとりは…………。僕に勝てると思ってるのかなあ？　僕、キミの通うお

こちやま向けのゲームセンターとはケタ違いにハイレベルのゲーセンの、トップランカーなんだけどお？」

「なんだっていいだろ。俺と美羽が、ハイレベルゲーセンのトップランカー様であるお前とお前の神姫とバトルして、勝ったら俺の方が強いってことだ。そしたら、お前より強い俺に美羽と一緒にいる権利があるってこと。それで構わないな」

バカでもわかるように説明してやると、少年はゲラゲラと汚らしい笑い声をあげる。

「傑作！ バカっているもんだねえ！ ていうか、”神姫と一緒にいる”って、やっぱりお友達ごっこかよ！ 一昔前のロボットアニメかっつての！」

「キーキーうるせえな……。もういいだろ。早くお前の縄張りとやらに連れて行け」

「あつはつはつは！ ……ふう。わかったよ。世間知らずなゆとりちゃんに、現実ってものを見せてあげるよ」

ようやく静かになった少年に、ゲーセンへと案内させる。

……今日でお別れだろうがなんだろうが、関係ない。

美羽は、俺が救う。

フードの少年に連れてこられた先にあったのは、いかにも不良の溜り場っぽい雰囲気ゲーセン。

床にはゴミが散乱し、煙たいような、酒臭いような、気持ちの悪くなる空気が充満している。

「ふふ、びびっちゃってるのかなあ？ ゆとりちゃんには敷居が高い場所かもねえ？」

「……………」

「……チッ。クール気取りやがって、キモイっての……………」

神姫バトルコーナーと思われる一角に着く。いかにもガラの悪そうな連中がたむろしていた。

雰囲気でなんとなく分かる。ただの不良ではなく、本格的にヤバそうなやつら。ゲーセンという場所を隠れ蓑にした、裏集団の集会所か何かなのだろう。そして少年は、そのトップ……………」

「戻ったよ。お姫様はどこだい？」

「こちらに」

美羽をさらったと思われる黒服が、美羽を乱暴に掴んで差し出した。

「マス……………」

「美羽！」

少し武装が汚れているように見えるが、とりあえず目立った外傷はない。おびえているのか、小さく震えながら俺を見ていた。

「そう吠えるなって、これだからゆとりは。……………」お前。お姫様をこのゆとりちゃんに返してやって」

「……ふん」

乱暴に突き出され、美羽を受け取る。

「美羽、大丈夫だったか」

「マスター……………」はい、私は大丈夫です」

「感動の再開はまだだよ。これは一時的にキミに貸してあげているだけなんだ。……フィールドを用意しな」

黒服に命令をだし、バトルフィールドがセットアップされる。

「それじゃあ、甘ったれなゆとりちゃんに、本当の神姫バトルってものを見せてやるうか。……起きろ、黒雨^{こくう}」

「……了解だ、主」

出てきたのは、蒼い髪に、褐色の肌、そして美羽とは真逆の漆黒の装甲が特徴的な、攻撃的なデザインの神姫。

確か、新悪魔型……。

「ストライフMk・2……」

ストライフMk・2、黒雨は、その紅い瞳に俺たちを捉えた。

瞬間、背筋をぞくりとした嫌な感覚が駆け抜ける。

「……壊していいのか？」

「いや、だめだ。お相手は大事な大事なお姫様だからね」

「……つまん」

「まあまあ。その代わり、あのゆとりの心を徹底的にぶち壊してやつてくれてもいいから」

「……ふん」

彼女の瞳は、オーナーと同じようにどこか淀んでいるように見えた。そんな歪んだ気配の中に、強者の纏うオーラが確かに入り混じっている。

「マスター、これは一体……」

「あのガキがな、強い奴にこそお前と一緒にいる権利があるとか言っ
て聞かないんだ。だから、お前を賭けて、バトルをする」

「えー？ ……マスター。そのために、こんな危ないところに……」

美羽は一瞬嬉しそうにしたが、その後すぐに申し訳なさそうな表情を浮かべる。

どうせ今日でお別れなのだから。そんな理由だろうか。

だとしたらそれは、見当違いな考えだ。

「美羽のためだ。不良の溜り場に来ることくらい、どうということ

はない。まあ、俺のEGOで戦いに巻き込んだみたいで、申し訳ないとは思ってるがな」

「……どうしてですか、マスター。私はどうせ、すぐに捨てられるような神姫なんですよ？　だったら、誰のところに行っても……」

「バカ言うな。捨てるなんて誰が言った」

「でも、私はやっぱり、何かマスターにひどいことをして、捨てられてるんじゃないかって……」

「そうと決まったわけじゃないだろ……」

昨日のように悲観的になる美羽を励まそうとすると、フードのガキが割り込んできた。

「そう、その通り！　彼女の言う通りなんだよ！」

「っ！？」

叫び声に、美羽はびくりと体を震わせる。

「私の……、言うとおり……？」

「そう。キミは覚えていないかもしれないけど、キミはねえ、毎度毎度オーナーのところで大暴れしてるんだよ」

「！」

「お前……！」

美羽は、目を大きく見開く。

自分で決めつけていたはずの可能性。しかし、やはり信じたくはなかったのだ。

「未改造の武装でも闇雲に振り回せば危ないからねえ。それを使つて暴れまわつて、マスターも、マスターの周りの人も、たくさん傷つけていたよ。ずっと見ていた僕が言うんだから間違いないよお？」

「あ……、ああ……」

震えている。消えたはずの記憶を揺さぶられているかのように、おびえている。

「はて、あるオーナーは、キミのせいで失明したって言わなかったかなあ。またあるオーナーは、手の自由を失って夢をあきらめることになったとかあ、他にも、キミが原因で、一番大切な人を失った

とかぁ……………」

「や……………やめて……………くださ……………い……………」

「そんな神姫を持つてるわけにはいかないからねえ。それでキミはいつもいつも、捨てられてきたのさ!」

「っ……………」

「でもお、僕が求めているのはそんな素質なの! 人を平気で傷つける、凶暴な素質! だからほら、安心して僕のところに来ていいよあ?」

「うるさい! ……もう黙ってる、ガキが」

「……………チツ。死んどけ、クソゆとりが」

うるさいガキを黙らせ、美羽に向き直る。

「マス……………タ……………、私……………やっぱ……………り……………」

「あんな奴の言うこと聞くな! 美羽はそんなことしていない!」

「でも……………でもお……………」

「とにかく、あんな奴のところに行ったら、きつともっと酷いことになる! 俺は、そんなのは嫌だ……………。だからせめて、俺と一緒に戦ってくれ! ……別れることになる覚悟はできてるから、せめて……………」

「ほおらぁ、もういいだろお? ぐだぐだお友達ごっこしてないで、さっさと準備しなよ、ウスノロのゆとりがよお」

「……………美羽。頼む。今度こそ、最後のバトルだ」

「マスター……………。……………ありがとうございます。こんな私のことをそんな風に思ってくれて、すごく、うれしいです」

やる気になったくれた美羽を、ゲートに送る。

「やっとやる気になったみたいだねえ。そんじゃ、ちゃちゃっと負けっっちゃってくれる?」

「同じ言葉をそっくり返そう」

「あゝ、はいはい。英雄気取りのゆとりちゃんみんなそんな風に強がって、みじめに負けてくんだよ。……………じゃあ、始めようか」

淀んだ瞳に、ギラリと歪んだ光が灯った気がした。

「行こう、美羽。……絶対に、勝つからな」

「はい、マスター」

瞳を閉じ、意識を集中させる。

思い出すんだ。あの頃の……、確かに強いきずなで結ばれていた、あの頃の気持ちを。

「……ライドオン！」

フィールドに降り立つ。いつものゲーセンとは、少し肌で感じる空気が違う気がした。

フィールドは廃墟を模した空間。ここなら、あちらのゲーセンでも戦ったことがある。

「気をつける、どこから来るかわからない」

「はい、マスター……」

廃墟ステージでは、互いのゲートが建物群を挟んで反対側にある。そのため、戦闘開始時には相手の姿が見えない。だから、警戒して動く必要があるった。

建物の陰に立ち、そっと向こう側の様子をうかがう。

「いました……！」

「占めた。向こうはこっちに気づいてない」

相手の神姫、黒雨は、荒廃した道路の反対側にいた。

相手がこちらに気づいていないことを確認すると、遠距離攻撃用のランチャーを転送する。先手必勝だ。

「スリーカウントで行くぞ」

「はい」

陰に隠れ、ランチャーを構える。気づかれないように、ロックオンはしない。

「スリー……」

手動で照準を合わせる。

「ツ……」

エネルギーを充填し、威力を高める。

「ワン……え？」

その時、信じられない出来事が起きた。

……廃墟に、霧が立ち込め始めたのだ

「まさか！ こんな機能……」

『マスター、敵が見えません!』

「しまった……!」

相手はこのゲーセンの特性を知っている。これを知っていて、こちらが動揺するのを待っていたのだろう。

『! マスター、ロックオンされてます!』

「何!？」

しかし、正面に相手の姿はない。センサーにも反応がなかった。ということは、一瞬で移動したということ。

『まさか、レールアクション!？』

「とにかく止まってちゃだめだ! 動き続けて……」
そう思ったが、遅かった。

背後に、何者かの気配を感じる。

『っ!』

咄嗟に地を蹴って横に跳び、振り向きざまにランチャーを構える。

『ふっ!』

『なっ!？』

相手の移動ラインから、逃げきれていなかった。眼前に、巨大な刃が迫る。

『うああ!』

躲し切れず、大剣に叩き落される。一撃が、今まで戦ってきたどの相手よりも重い……!

『……遅い』

『!』

刃は続けて更に振り下ろされようとしていた。

『っ!』

転がりながら起き上り、躲す。

接近戦ではランチャーは不利だ。こちらで武器を小剣に切り替える。

相手の武器は大剣。ならば、素早い動きで翻弄すれば、勝機はある!

『やあ！』

『……！』

素早い突きを入れ、相手の体勢を崩す。

続けて、相手の頑丈な装甲の合間を縫うようにして、袈裟斬りにする。しかし……。

『……無駄だ』

『あ……！』

相手は大剣で攻撃を受け止め、弾き飛ばす。

そしてそのまま、薙ぎ払うように大剣を振う。

『っ！』

さつき以上に重い攻撃に、吹き飛ばされる。

『ま……、まだまだ！』

後転して受け身を取り、体勢を戻す。このままじゃまずい。流れを変えなければ……。

『……から空きだ』

『！？』

至近距離に、銃口があった。

『！』

咄嗟に盾を構える。

瞬間、無数の弾丸が、巨大な銃身から連射される。

『く……っ……！』

一つ一つの威力が高い。ガードが碎かれることはないだろうが、このままではまずい。

銃弾と爆炎で視界が埋まる。その時、突然銃撃が止んだ。

そして、息をする間もなく、再び大剣を構えた黒雨が眼前に迫る。

『はあ！』

『っ……！』

盾で受ける。が、すでにガトリングによって崩されかけていたこの体勢で受け続けるには、その攻撃はあまりにも重すぎた。

立て続けに叩きつけられる重撃。そして……。

『うああ！』

ガードが砕け、体勢が完全に崩れる。

そして、身動きの取れなくなったその一瞬で、黒雨は次の武装を転送する。

それは、一見ただの刃に見える武器。しかし、ただの剣とは明らかに造りが違った。

武器にエネルギーがチャージされていく。そして……。

『ふっ！』

『うあ……！』

刃が、装甲に深々と突き刺さった。

身動きが取れず、そのまま持ち上げられる。そして……。

『……砕ける』

『っ……！』

全身を襲う衝撃。至近距離で起こる大爆発。今までに見たこともないほどの衝撃波が、全身を吹き飛ばす。

『う……あ……』

「美羽！　しっかりしろ、美羽！」

あまりの衝撃に、美羽は吹き飛ばされながら意識を飛ばされかけていた。

「美羽！　美羽……！」

『……はっ！』

呼びかけに、意識を取り戻す。

黒雨とはかなり距離が離れていた。それほどの衝撃で吹き飛ばされたのだ。

追い打ちをかけようと、黒雨はガトリングを転送していた。

『っ……！』

受け身を取る。そして、レールアクションを発動する。負担は少なくないが、ここでの攻撃を喰らってしまったら、一巻の終わりだ。

エネルギーをチャージし、一気に駆け出す。

ロックを外し、空を駆け抜ける。吹き飛ばされていた方向、相手とは真逆の方向へ。

『……逃げる気か』

そうつぶやいたのが聞こえた気がした。

相手のロックオンの有効範囲外へと逃亡し、霧に隠れながら、そのまま建物の陰に逃げ込んだ。

『はあ……はあ……』

「大丈夫か、美羽」

『な、なんとか……まだ……』

健気にそう答えてくれたが、あの攻撃をもろに喰らったんだ、あと一発でも重い攻撃を喰らったらヤバいかもしれないな……。

こちらの武器は、小剣にレーザーランチャー、そして大剣。防具の方にも、とりたてて役に立ちそうな特殊な機能はついていない。相手の手の内は分かっている。重い攻撃で圧倒し、パイルバンカーでとどめを刺す、パワーアタッカーだ。しかしそうでありながら、決して隙を見せない俊敏さも兼ね備えている。

少なくとも、小細工で突き崩すには強く、硬すぎる。ならば、こちらも力押しで……？ ……いや、それでもわずかに劣るだろう。相手は口だけでなく、確かな強さを兼ね備えていたのだ。

『……マスター』

「どうした？ 何かいい手があったか？」

『いえ……。その、こんな時に話すことじゃないとはわかっているんですけど……』

ライドを通して、遠慮するような、罪悪感とすら言えるような感覚が伝わってくる。

それだけで、彼女が何を言いたがっているのかわかった。

「……どうしてこんなに構ってくれるのかって？」

『……はい。こんな危険を冒してまで、どうして私の為に戦ってくれるんですか？ もし負けたら、マスター、無事に帰れないと思います……』

ゲーセンにたむろしていた面々を思い出す。確かに、ただの不良とは違う……。もっとヤバそうな雰囲気でもあった。勝とうが負けようが、無事に帰れる保証はない。だが……。

「負けるつもりはない……って、今言うべきことはそんなんじゃないよな」

どうしてこんなにも必死になるのか。正直自分でも不思議ではあった。もう他人ではないからというのもあったが、俺はそれだけで危険な賭けに乗るような奴じゃなかったはずだ。

どうしてかと言ったら……、そう……。

「……美羽のことが、好きだからだろうな」

考えるのではなく、ふっと浮かんだ答えをそのまま口にした。自分の正直な気持ちだ。

「……え？ ええ！？」

戸惑うような叫び。状況を思い出し、慌てて口をふさいだ。

構わずに続ける。どう転ぼうが、言うなら今しかないと思ったから。

「今まで会ってきた誰よりも、美羽は俺のそばにいる。そんな気がするんだ。だから、美羽と離れたくないし、あんな腐りきった奴に渡したくなんかない」

「はうあ……えっと、それって……」

「昨日の夜話してて、気づいたんだ。もう預かってるだけの存在じゃない。俺は、美羽とずっと一緒にいたいんだって」

「マスター……」

「だからさ……」

ずっと考えていたことを、口にする。

「お前、家に来い。どうせいつか誰かの手に渡るなら、俺のところに来い」

「……！」

感極まったような、声にならない声。

ライドを通して、喜んでくれているのが伝わってきた。

「押し付けあうんじゃない。俺が、俺の意思で、お前を引き取る。そんでお前は、ずっと俺のところにいるんだ」

少し強引な言葉。だが、俺の思っていることは、まっすぐに伝えたいと思った。だから、飾らずに、かつこつけずに、思ったままのことを言う。

「あのガキの言っていることが本当かどうかは、俺にはわからん。だけど、たとえそれが本当だとしても、美羽が俺を傷つけようとしても、俺は美羽と共にいる」

『マスター……。……。でも、私は……』

「誰かを傷つけたことを、美羽は嫌がっているんだ。だったらそれは、きつと美羽の意思じゃない。もし美羽が本当に俺に刃を向けてきたとしたら、俺はそんなお前を救う」

『……。マスター……。』

嗚咽交じりに、俺を呼ぶ声。

『……。そんなこと、言ってくれたの……。、たぶん、マスターが……。、初めて……。です……。嬉し……。マスター……。』

もうこれ以上、美羽に傷ついてほしくないから。笑顔の美羽と、ずっと一緒にいたいから。

だから……。

「……。だから、俺の所に来い、美羽」

『はい……。はい、マスター！』

美羽が、心の底から笑ってくれたのを感じた。

もう、迷うことはない。あとは……。

「あの生意気なガキを……」

『やっつけるだけ、です！』

神姫との絆、ライドレシオは、そのまま神姫の戦う力になるという。

さっきのままの、すれ違ったままの俺たちなら、確かに勝算はなかったかもしれない。

だが、今ならいける。幼稚な考えかもしれないが、そんな気がした。

どうせ、小細工の効かない相手だ。

『真正面から、戦うのみです！』

建物の陰から響く、黒雨の叫び声と、苛立たしげに建物を破壊する音。

武装を転送し、ジツと精神を集中させ、機を窺う。

隠れていた、建物と建物の隙間の向こう。霧の中で、足音が聞こえる。

息を殺し、少しずつ迫る、その時……。

——霧が晴れ、彼女の姿がはっきりと見えた。

『今だ！』

ロツクオン。そして地を蹴り、空を駆け出す。

『……そこか』

ロツクオンされ、ガトリングが構えられる。

『遅いです！』

『何……！？』

ロツクを外し、方向を変える。一瞬で相手の背後を取り、小剣を構えて突進する。

『やあああああー！』

『チッ』

渾身の突きは、彼女の周囲を囲うように現れたバリアに阻まれる。

『まだです！』

『クッ！』

立て続けに斬撃を与える。広範囲バリアの欠点は、強度の低さだ。手を止めずに、攻め続ければ……！

『これで……行きます！』

止めに、大剣を転送して、力いっぱい叩きつける。

『な……！』

バリアが、破れる。

防壁を打ち破った大剣は、その勢いを保ったまま振り下ろされる。

『ぐああああ！』

がら空きの背中に直撃。黒雨にダメージを与えた、確かな手ごたえがあった。

『生意気な……！』

相手も大剣を転送し、振り向きざまに叩きつけてきた。

回避せず、こちら也大剣で受け止める。

『力でワタシに勝てると思うな……！』

『負けません！ 私とマスターは、絶対に！』

俺の思っている言葉を、そのまま美羽が口にする。ライドレシオは限界を超え、今や俺たちは完全に一つだった。

『身の程を知れ。ワタシこそが、絶対の破壊者……。お前は、ワタシに破壊されるのだ……。！』

拮抗する力。それを崩したのは、黒雨の方だった。

こちらの剣を渾身の力で振り払うと、黒雨は飛び退き、ガトリングを転送する。

『これならどうだ！』

『どんな勝負でも、私たちは負けません！』

レーザーランチャーを転送。

撃ち出したのはほぼ同時。無数の弾丸と一筋のレーザーがぶつかり合い、またもや拮抗する。間で立て続けに爆風が起こり、互いの間を寄せては引いていく。

『何故だ！ どうしてあきらめない！』

『今までとは違うから……。初めて、未来に希望を抱くことができたから！ だから、立ち止まってなんていられないんです！』

『チッ！』

相手の弾切れとこちらのエネルギー切れもまた同時だった。

『今度こそこれで……。』

『決着です！』

小剣を転送。相手はパイルバンカーを取り出した。

レーザーアクションを発動し、互いの出し得る最高速で空へと翔け

出す。

複雑にルートを変えては、正面から突進し、ぶつかり合う。棄てられた街を、白と黒の軌跡が縦横無尽に駆け抜けた。

ビルの上に降り立つ。決められていたかのように、同じ瞬間だった。

『面白い！　ここまで対等に戦える相手は、久しぶりだ！』

最初の時とは明らかに違う雰囲気で、黒雨が言い放った。俺たちと同じように、黒雨の言葉もあの少年と重なっているように思えた。

『できれば、もっと長く楽しませてもらいたいな』

『残念ですけど、こっちは遊びじゃないんです』

『ふっ、そうだったな。哀しいな、こんな形でなく巡り合っていたなら、純粹に戦いを楽しめたらうに……』

『そうですね。でも……』

小剣を還す。そして、大剣を転送した。

『宴は終わりのようだな』

相手も同じく、大剣を手にする。

『来い！　お前の出し得る、最高の力で！』

『言われなくても！』

全てを解き放つ。そんな思いに反応するかのように、自然と体が動く。

宙へと舞い上がる。パーツが体を離れ、もう一つの姿を織り成していく。

最初に見たとき「翼のよう」と形容したリアは、まぎれもなく、天空を翔け抜ける翼となる。

——それはまさに、天翔ける天使の騎馬。

小細工無用。正面から突進する。

対するは、漆黒の騎馬。天使と悪魔の、刹那の決闘。

『やあああああああ！……！』

『はあああああああ！！！』

白と黒の軌跡が交差し、弾ける。

一瞬の駆け引き。相手の刃がこちらの装甲を斬り裂き、こちらの刃も相手を斬り裂いていた。

二頭の騎馬は、元の姿に戻り、主の下へと還っていく。

そして、背を向けたまま、ビルの屋上に降り立つ。

風すらなく、ただ、無音だけが響き渡っていた。

一瞬の静寂の後、黒雨が小さく口を開く。

『……強いのだな』

『言っただけです。私たちは、負けないと』

激しい衝突の後とは思えないほど、互いの言葉は落ち着いていた。

黒雨は、深く息を吐き、続けた。

『……ワタシは常に、破壊する立場だった。この場所で、最も強き存在だった。……それなのに、ワタシは常に飢えていた。そしてそれは、きつとまだまだ壊し足りないのだと思っていた』

背を向けたまま、互いの表情も見えないまま、黒雨の呟きは、廃墟に呑み込まれていく。

『……今、気付いた。飢えていたのは、強者との戦いになつたとなだから、お前との戦いは、とても楽しかった。破壊衝動ではなく、戦うことの楽しさを感じていた』

『良かったです。破壊するだけの神姫なんて、悲しいですから』

『……全くだ』

今度は、深く息を吸う。語らいが終わろうとしているのを感じた。

『……もっと、強くなれ。もっとワタシを楽しませてみる。お前の主と共に、もっと高みを目指せ』

『……はい。今度会うときは、もっと強くなっています』

『……ふっ。楽しみだ。その時までワタシも、更に力を高めて待っているよ』

背後で、一つ足音が聞こえた。それは、歩くのではなく、振り向くでもなかった。

『……また……会おう』

『……はい』

ずっと握りしめていた大剣を、還す。

それに反応するように、背後で、何かが倒れる音がした。

——全てを賭けた戦いは、静かに幕を閉じた。

戦いが終わり、帰るころ。すっかり日が暮れ、夜光が街を満たしていた。

少年はあれで意外と義理深いところがあるのか、美羽を俺に返すことには文句ひとつ言わず、それどころかゲームセンターの近くの表通りまで案内してさえくれた。

別れ際には、もっと強くなつてまた彼等と戦うことを命令された。強力な神姫を作るためのサンプルがどうかまだ言っていたが、さっきの戦いは、彼等の心にも響くものがあつたらしい。

崇田や初野、テイルとは、いつものゲームセンターで合流できた。三人とも、美羽が無事なことを喜んでくれたと同時に、俺が単独で危険に身を晒していたことについてこっぴどく叱ってきた。

初野とはゲームセンターの前ですぐ別れ、そして今、崇田とも別れるところまで来ていた。

「……じゃあ、いいんだな？」

歩きながら美羽のことを相談すると、崇田は快く許してくれた。

「おう。オレなんかと一緒にいるよりも、久遠と一緒にいたほうが有意義っぽいしな。神姫的にも、……女の子的にも」

「マ、マスターってば！」

「おっと、オレはもうマスターじゃないらしいぜ。まあ、またたまに会おうや」

「あ……。はい、えっと、崇田さん」

「おおう、なんかいきなり他人みたいだな。僕ちゃん、さみしい！」

「やめろ、気持ち悪い、いつそ消えてくれ」

「ちょ、ひどくない！？」

冗談交じりの会話。だけど、崇田も俺を信じて、美羽を託してくれるということがわかった。

「んじゃ、また明日な、久遠、美羽！」

「ああ。また明日」

「おやすみなさい、崇田さん」

崇田とも別れ、美羽と二人きりになる。

ゆつくりと、静かな道を歩いていく。

「なんか、勢い任せみたいなのところもあったけど、改めてよろしくな、美羽」

「はい、マスター！……えへへ」

「ん？ どうしたんだよ？」

「えっと……。なんだか、こんなにマスターって呼ぶのが嬉しいの、初めてで……」

そう言つて、彼女は照れくさそうに笑う。

「でも、前のマスターのこと、覚えてないんだろ？」

「それはそうなんですけど、でも、なんだかわかるんです。こんなに暖かい気持ちになるのは、初めてだつて」

「……そうか」

なんだかこそばゆくもあり、それ以上に、嬉しかった。

彼女は心の底から嬉しそうに笑っていたが、ふとその笑顔が陰つてしまう。

「マスター。……私、大丈夫ですよ？」

「……あいつの言つてたことが」

少年は帰り際に、真剣な口調で教えてくれた。

「ゲーセンでの話には誇張があつたが、美羽に決して良くない”特性”があるのは事実であるということ。それが顕現した時、俺は決断に迫られるということ。」

最も、根本的なところで性根が腐っているのか、詳しくは教えてくれなかったが……。

「……大丈夫だ。言つただろ、もし美羽が俺に刃を向けてきたとしたら、俺はそんなお前を救うつて」

「……でも、やっぱり怖いんです。こんなに暖かい気持ちを知ってしまっただけに、私がこの手で、これを壊してしまうかもしれない

ということが……」

「大丈夫だつて」

俯いておびえてしまっている彼女の頭を、ポンポンと軽く叩く。
「俺は、美羽とどこまでも一緒にいるつもりだ。俺たちの間を引き裂く物が現れようが、……たとえ、その刃が美羽自身だろうが。そんなの、全部乗り越える覚悟でな。だからさ……」

美羽を手の上に載せ、もっと近くに寄る。

「俺を信じて、一緒に来てくれないか」

「マスター……」

月明りが、美羽の頬に一筋のラインを浮かべる。

美羽は、その涙を拭うと、ふっとほほ笑んだ。

青白い月影に照らされるその表情は、まさに天使の微笑で……、思わず見とれるほどに美しかった。

こんなに美しい存在をどうして手放すことがあるだろうか。そんなことを改めて思ってしまうほどに。

「……よろしくお願いします、マスター」

「ああ、よろしく」

「どこまでも、どこまでも一緒ですよ」

「ああ」

「……マスター。私の、たった一人の、マスター」

綺麗な満月の下で、俺たちは誓いを交わした。

こうして、俺と美羽は、共に歩んでいくことになる。

何も起こらないという保証はない。だが、そんなのどんな神姫だつて一緒なはずだ。

要は、俺がそれ乗り越えてでも、彼女と一緒にいることを選ぶかどうか。

俺は、いつまでも、彼女と一緒にいたいと思う。そして、どこまでも歩んでいきたい。

鳥が美しい羽を広げ、久遠くおんの彼方まで、いつまでもどこまでも飛んでいくように……。

—
C
o
n
t
i
n
u
e
s

t
o

t
h
e
i
r

s
t
o
r
y
.
.
.

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5237y/>

武装神姫 Battle Prelude

2011年11月15日03時19分発行